

條と書べし、字頭我方にして渡すなり、

〔古今著聞集十三〕延長二年十二月廿二日、内裏御賀四十醒醐を中宮藤原穩子奉らせ給けるに、略中

中宮の御かたより、樂器を奉らせける中に、北邊左大臣信源の清和御時、手自か、れたる、春鶯囀

の箏の譜を、木の枝に付て奉られける、めづらしくやさしき、御をくりものなりかし、

〔大和物語上〕故源大納言清隆宰相におはしける時、京極のみやすどころ、藤原亭子院宇の御

賀つかうまつり給とて、かゝる事をなんせむと思ふさ、げ物、一えだ、二えだせさせて給へと、聞

え給ひければ、ひげこをあまたせさせ給ふて、としこに色々にそめさせ給ひにけり、まきもの、

おりものども色々にそめ、よりくみなにかと、みなあづけてせさせ給ひけり、

〔貞丈雜記九進物〕一進物にのしを添る事古のしとばかりいふは非也、古は大刀、馬、鎧、鞍、鏡、其外すべて

進物に熨匁を添る事は無之、さればのし包といふ物もなし、のし匁を進物に添るは、後世のなら

はし也、當世にても太刀目録などには、熨匁をそゆる事なきは、古風の残りたる也、我家伊に傳

へたる熨匁の包形は、京都將軍家の庖丁人、大草流の式三獻の時、引渡しの膳にすゆるのし匁の

包形也、今當世進物に必のし匁を添る風俗なれば、當家にても世のならはしにそむきがたき故

のしあはびを進物にそゆる時には、かの大草流の引わたしの包形を借用る也、古は進物にのし

あわび添ざる事、古書を見て知べし、

〔本朝食鑑十〕饅略中

長饅訓乃釋名熨斗言引饅片令長則如

集解、造長饅法、采生饅去腸殼、以小刀從耳端環切至中肉成條、次第切盡條條洗淨、略暴乾待生乾

而引舒令長、復暴乾作明白條、此謂長饅、短饅亦略同、中或用榮螺而亂之、然味亦不減饅、故謂榮

螺熨斗略中本邦賞長饅者、仍爲上下賀祝之先供也、神祠亦奠之、取延長悠久之義乎、

熨斗